

ばってん

事務長会報第53号
令和5年3月31日

長崎県公立学校事務長会
長崎県立長崎南高等学校内

〒850-0834
長崎市上小島4-13-1
電話 (095) 824-3134

『合理性』を考える

副会長（長崎鶴洋高等学校） 早田 正博

私は自分では割と物事を合理的に考えるタイプだと思っている。良く言うと、「論理的」とか「臨機応変」とかに言い換えられるが、悪く言うと、「優柔不断」とか「流されやすい」になってしまう。事務長という職務柄、決断を迫られる局面も多く、どちらかというと後者にあてはまることも多々ある。周囲の意見を聞くと、「なるほどそういうこともあるなあ」などと迎合したりして、当初の考えを簡単に撤回することもしばしば。理解ある事務長だと思われるのか、それとも芯の弱い事務長だと思われるのか……。合理的なものの考え方は良いこととも一概には言えないのかとても悩ましい。

一般的に「合理化」というと、昭和世代が連想するのが、例えば、高度成長期における工場などのオートメーション化（今風にいえばICT化でしょうか）やバブル崩壊後における解雇などの人員整理、いわゆるリストラといったポジティブな印象を与えるものとネガティブな印象を与えるものの両方の側面がある。

そもそも「合理的」とは何だろうか。私たちが日常的によく使っている単語のひとつだが。辞書で引いてみると、①道理や論理にかなっているさま。「一な自然界の法則」②むだなく能率的であるさま。「一な処置」と書かれている。

これを身近なところに重ね合わせてみると、①の意味では、「適正」「適切」とか「適法」と言い換えることができる。「適正・適切に対応します」などと監査の時に使われるあの決まり文句である。やはり合理性がなければ指摘事項になってしまう。②の意味では、「業務改善」「業務の効率化」と言い換えることができるだろう。人員が減っても仕事は複雑化、多様化し、結果として増えるという悪循環の中では合理化は必須である。

さて、前置きはこのくらいとして、自分が日々やっていることに「合理性」がどのくらいあるのだろうか。改めて考えてみると、法的根拠や手引書の決まり事などをよく確認もせずに「多分こうだろう」「確かこうだったよな」と独りよがりの判断で、結果間違っていたというようなことも過去あったし、業務改善と叫ばれはじめてから久しいが、まだまだムダなことも多い。気づいていても手をこまねい

ているばかりで実行に移すのが億劫になることも正直ある。「忙しいから」という呪文ばかり唱えていても何も変わらないことは知っているのだが。

とは言いながら一方では、未来ある後輩事務職員に、学校事務がやりがいや魅力のある仕事として認識を持ってもらい頑張ってもらうためにも良い意味での「合理化」を進め、事務職員の存在価値を高められるよう、少しずつでも前進できたらと切に願っている。

今年度事務長会では、三つの委員会（プロジェクトチーム）が立ち上がり、私はその一つ、業務改善委員会に参加させていただいている。この原稿を書いている時点では私はまだ何も活動していないのだが、今後メンバーの皆さんの知恵をお借りしながら、遅ればせながらも業務改善について真剣に考え、取り組んでいきたいと考えている。ひとりで考えていてもいいアイデアはなかなか浮かんでこないものだが、他人と議論、あるいは雑談を交わす中で意外とアイデアは浮かんだりする。同じ職務・職責をもった仲間同士で共通の課題に向き合いながらひとつひとつ解決策を見つけ、これを事務長会会員の皆さんに情報発信していただければいいなと思っている。この寄稿を読まれた方で三委員会のプロジェクトチームの活動に少しでも興味をお持ちいただきご参加いただけたら幸いです。

今回の執筆をきっかけに「合理的」「合理性」を改めて考えてみたが、本来の意味の「合理的」な仕事をもっとできるよう努力していければと思う。



誇りと喜びのある仕事～学校は地域の光

西陵高等学校 高木 七恵

自称ミス長崎（ミスが多かったから）の私が今年無事定年退職を迎えられるのも、導いていただいた先輩方と学校という夢のある職場のお陰です。教育の現場で働けた私の仕事人生は幸せだと感謝しています。頑張る生徒の成長とそれを支える教職員、うるうる感動の場面や素敵な人達との出会いがあり、人を育てる教育の現場で生徒のために働く事には喜びと誇りがあります。年々業務量は増えるし、監査は厳しいし、高い壁を感じることもありますが、視点を変えて「何のための仕事なのか」「この仕事の先にあるもの」を意識すると何をすべきかの指針となるように思います。目の前に生徒がいて、生徒のために何ができるかを発想したり限られた予算を学校のためにどう有効に使うかを考えるのは楽しく、AIにはできない私たちの特権です。

写真は長崎特別支援学校の生徒のために長崎工業高校生が課題研究として福祉機器を作成し、贈呈してくれた時の私の最高一枚です。長崎特支に着任当時、肢体不自由の子どもたちのために職員が苦戦しながらスイッチ類を作成していたのを見て、工業高校教諭に指導を依頼したのが始まりです。寝たきりの生徒が頬でスイッチに触れてタブレットで遊ぶ映像に感激しました。その姿に、私はどうしても工業高校の生徒に「人の役に立つものづくり」を実感して欲しいと思うようになり、長崎大学工学部石松教授との出会いなどを経て、やっと半年後に企画が実現した時は心が震えるほど嬉しかったです。長崎工業の生徒さんが何回も長崎特別支援に交流に来て「友達のスクールライフがより快適になるように」と工夫を重ね、完成した作品とその思いに胸が熱くなりました。もともとは職員の困りごとを解決したいとのシンプルな思いから発想したことです。様々な校種を経験し行政としての専門知識がある教育事務にはその発想力・マネジメント力などを通して、チーム学校の一員として生徒の未来を拓く大きな可能性があると思います。DX、AIと社会が変革期にある現在、教育事務に求められるスキルで、淘汰されないための道かもしれません。柔軟に考え発想しチャレンジすることを大切に、長

崎県や教育の未来についても自分事として考える職員を育てて欲しいと願っています。ビジネス・バリュー・クリエーションズ代表山本康博氏によれば発想力を鍛えるためのポイントは①物事を疑ってかかること②周囲の変化を注意深く観察し、興味を持って自分の目と耳を使うこと③何事においても「できないと言わない、思わない」こと、そして最も大事なことは「人を喜ばせたいというシンプルな気持ちを忘れないこと」（「1日1話読めば心が熱くなる365人の仕事の教科書／藤尾秀昭」より抜粋）とあり、得心しました。私も事務職員には書類ばかり見ていないで行事に参加したり授業の様子や発表などを見に行くように勧めています。今を生きる生徒達にとって大事な事は何か。現場を見ないとわかりません。われわれ一人一人が生徒のためにいきいきと喜びをもって働くことができれば学校から地域を巻き込むようなムーブメントが生まれ、学校は地域の光となるのではないのでしょうか。教育は未来への希望。少子化、過疎化等課題多き現状ではありますが、野村研究所首席研究員藤野直明氏によればDXの時代、地方にチャンスありだそうです。五島高校生主催の環境シンポジウムでは国立環境研究所の江守正多氏が「関心を持つことで世界は変わる」とグレタさんと奴隷制度が廃止になった事を例におっしゃいました。「どうせ無理」ではなく「どうしたらできるかを一緒に考える」ための仲間。つながり合い、高め合うための事務長会を皆でつくっていきましょう。どんな時も明るく希望を語るのが管理職の仕事。そう自分を鼓舞しています。ところで12月10日の長崎新聞に「防衛省が世論工作研究」の見出しでAIを活用しSNSのインフルエンサー等を利用する世論操作研究開始の記事があり映画イーグルアイを連想して衝撃を受けました。（イーグルアイについては成田悠輔氏のYouTube22世紀のBPMで分かりやすく解説されています）自分で考える力を持った生徒を育てる教育の重要性をひしひしと感じました。



37年間全てに感謝

盲学校 鶴見 吉孝



「鶴見さんのお宅でしようか!? 私、北魚目小学校の…」昭和61年の3月、突然、見知らぬ1本の電話から私の長崎県学校事務職員は始まりました。

私は、採用されてからの7年間は義務制でした。平成5年から大村工業高校へ異動となりますが、この学校では給与・旅費だけでなく、県費歳入（もちろん授業料等の督促も含みます）・歳出はもちろん、部活動会計、生徒会計等の私会計、そして教職員との連絡調整の大切さ、はたまた酒の飲み方まであらゆる事を教えていただきました。とてもきつかったけれど楽しくもありの6年間でした。この間に結婚もして、子供も

2人誕生して生活の基盤を整えたのもこの時期でした。

当時の至らない私の指導に当たってくれた事務室の皆様方、本当にありがとうございます。そしてある時、私が学校近くのK飯店で、ふと財布を見たら20円しか入ってなく、危うく無銭飲食になりそうなところを救っていただいたM事務長さんには本当に感謝の念しかありません。

平成11年からは長崎養護学校、平成15年には西彼農業高校へと異動しましたが、この2校では、施設設備の改修・改築を施工計画から完成に導くまでの面白さを学びました。施設業務の楽しさに目覚めたといってもいいぐらい充実した時間を過ごせたと思います。

その後、幾多の学校を廻りながら今の盲学校に至ります。さほど内容もない37年間ではありましたが、退職を前にして色々な思い出が頭の中を回っています。この職に就かなければ巡れない土地もありましたし、出会えない人もいました。行く先々で貴重な経験ができたのも、又自分の力以上の仕事ができただけのも、様々な人々に支えられたおかげと感謝しています。何とか無事に退職の日を迎えられそうです。皆様方、本当にありがとうございました。

三国一の幸せ者

佐世保工業高等学校 寺田 敏郎

このタイトルにピンと来た人は、間違いなくお笑いは、「第7世代」ではなく「たけし世代」である。筆者が高校生の頃から始まった「たけしのオールナイトニッポン」はバイブルであり、教祖様の声を漏れなく拝聴しようと120分のカセットテープに取り溜めしたものである。

番組終了後、放送局からの申し出により、すべて送ってしまったが、「なんでも鑑定団」に出せば、なにがしかの金額がついたに違いない。惜しいことをした。

さて、退職にあたっての駄文にこのタイトルをもってきたのは、事務長になって、いかに自分が事務室の職員に恵まれてきたかということ伝えたかったためである。会議や飲み会のたびに、けっこうまわりの事務長さんからいろいろ問題のある職員の指導に悩む話を聞かされたが、自分はそれを感じる事がなかった。

退職にあたって以前は、ゆかりのある職員による慰労会が企画されることがあったが、自分は逆に今まで、一緒に勤めてくれた職員を招待してお礼する会を開きたいくらい

である。(ただし会費制で…)

事務長になって、まわりに恵まれたなと感じ入っているが、果たして自分はまわりを幸せにしてきたのだろうか？

「さだ企画に、県民スポーツ課から変な電話があったと秘書課に苦情が来たぞ」と渋い顔をされたH部長、知事決裁の案件を教育長までにとどめたため、H副知事のところに一緒に頭を下げに行くはめになったA課長、…思い返すと多くの方々を不幸にしてきたものである。この場を借りて陳謝いたします。

最後に、10年間のリスナー生活で唯一殿に読まれた一作で締めます。

「そんなこというんだったら…」コーナー！

「長崎県佐世保市ペンネーム“損な事言うん田 タラ”ってくだらねえな」

「キャシー中島が月見草でダイエツトなんていってるけど、そんなこというんだったら、梶原一騎をあんなに痩せさせた刑務所の方がすごい。」

「ばかやろう、梶原一騎は病気で痩せたんだよ。しょうがねえな…」

以上お粗末様でした。ジャンジャン！



濃縮還元とストレート

宇久高等学校 多久島由子



宇久高校へ新任事務長として赴任し、早くも1年。苦戦しつつも「完全開き直り」で仕事をしているため、それなりに業務の楽しさを感じている。前提に事務室職員に恵まれたからであることは言うまでもないが。

さて、表題の意味について。今の私を例えたとすれば、ジュースでいう、「濃縮還元」だということ。私は平成4年から20年間を調理員として勤務し、事務職は11年目である。そんな薄っぺらな経験では、大半の仕事が難題でしかなく、ジュースで言うなら10年という期間に情報が濃縮され、(搾り出すときに必要情報まで零れ落ちた)、必要時に不足分をその場で必死に嵩増しているような状況であろうか。諸先

輩方はストレート！長期間で蓄え続けてきたものを常に更新。求められたときには味も香りも生きたままのジュースを提供できるような。まあ、仕方がない！濃縮還元だって美味しいもの！しどろもどろでもいいや。時間がかかってもいいや。そんな心の持ち方で、冒頭の楽しさに無理矢理結びつけている状況なのか？そして更に自己暗示をかけるのだが、それは濃縮還元のメリット。微生物繁殖を抑える！コストダウン！など。法改正という名の微生物、経験が浅い分、繰り返される法改正(微生物繁殖)は、過去との混乱が少ないのかも？コストダウンなんて事務職員として一番大事じゃないの!?なんて、こんなポジティブさを大切に。

写真はフェリーに揺られ宇久島まで一緒にやってきた我が家のカメラ。ウサギとカメの童話の言わんとしていることは、「カメラが見ていたものはウサギではなくゴールであり、周りに惑わされることなく、本質をしっかり捉えよ。」そしてもっと大事なことは、「そもそもゴールは設定できているのか？」ということらしい。毎日ベランダのカメに餌をあげながら、明日への活力をもらっている。

壱岐商高に赴任して

壱岐商業高等学校 下迫 興三



4月の田植えの時期に赴任してから、もう稲刈りも終わってしまい、あっという間に年末を迎えました。夏の台風もなんとかやり過ごすことができ、つい先日まで熱中症注意報や県費エアコンの電気代を気にしていたのが嘘のように、とても冷え込む季節になりました。年々、時間が早く過ぎていく気がします。

さて、本校には、総文祭の郷土芸能部門で全国大会に出場したことがある「壱州荒海太鼓部」があります。他の学校にはあまりない部活動で、放課後には太鼓を叩く音や、笛の音色が流れてくるため、放課後はお祭りのような雰囲気につつまれます。心がゆさぶられ、奮い立たされる良いサウンドの中で仕事をしています。本校で7校目、今までは施設を担当することが多く、

点検で歩き回って1万歩を歩く日々を過ごしていましたが、事務長になり、事務室から積極的に出歩く機会が減って、非常に体力が衰えている感じがします。台風への備えとして、校地内の飛散防止対策や、校舎屋上での状況確認をしたりしましたが、それだけの行動で脚が筋肉痛になって、歩けなくなったときもありました。そのうち住宅の一室をジム化して、体力トレーニングをやらないといけないな、と思っています。

壱岐島の風景は見晴らしがよく、空が高くて、清々しいところです。学校にはスズメが多く、朝から賑やかな鳴き声がしています。また、壱岐牛がおいしい印象ですが、まだまだコロナ禍で食べ歩きがしにくい状況ですので、療養期間などが短縮されたら、安心して食べ回りたいと思います。また、観光写真で有名な「猿岩」があります。写真よりも実物のほうが、猿感がマシマシです。圧倒的な存在感があって、この場所ならではの、面白い風景だなどと思います。

ここまで徒然なるままに書き散らしてしまい、うまくまとまりませんでした。これから、どうぞよろしくお願ひします。

学校事務職員として採用されて

県教育庁 学芸文化課長 日高 真吾

この度、事務長会報「ばってん」の執筆依頼を受け、事務長及び県立学校勤務経験が全く無い自分が引き受けて良いものか悩みましたが、学校事務職員人生の中で、たくさんの先輩諸氏にお世話になったことを振り返る良い機会と思い引き受けることとしました。

私は、昭和62年度採用で、新任の地は地元壱岐の八幡小学校の事務職員でした。そこでの2年目にS教頭先生(後校長)との出会いが私の人生を変えたと言っても過言ではありません。とてもパワフルな先生で、「子ども達のために」を第一に考える人で、ある時、グランドに使用済みの電柱10数本と投網を運んで来て、保護者や地域の方と共同し、巨大なアスレチック遊具を日曜日大工で作ってしまいました。その夜は教頭宅で保護者と大宴会です。本当に保護者と地域、学校が一体となった小学校でした。皆で協力して何かを作り上げる達成感・楽しさを味わったものでした。その後、校長先生には仲人をしてもらい、今も親交を温めています。

次の県教育センターでは、ちょうど今の本館の建設と重なった時期でした。当時のK総務課長のもと、工事の立会いと備品の入札・搬入手続き、研修受講旅費のセンターでの一括支給への変更など、K総務課長のアイデアを形にするのに日々明け暮れ、業務の進捗管理と「ほうれんそう」がいかに大事かを学んだ時期でした。

次は、長崎教育事務所総務課を経て、教職員課給与班、お決まりのコースです。3年間、給与の支給や昇給昇格担当を経験しました。そのまま教職員課総務係へ異動、2年間予算と議会を担当、議会では文教委員会に初めて担当として出席し、その場の異様な雰囲気や圧倒されたのを覚えています。また、この頃は県のソウル事務所があったため、教職員課を2班に分け2泊3日の忘年ソウル旅行を計画したのを覚えています。金曜日出発組と土曜日出発組に分け、土曜日の夜に合流し焼肉忘年会を開催しました。韓国語は分からなかったのですが、身振り手振りでどうにかなったものでした、ものすごく寒かったことを覚えています。

次が、なんと知事部局の政策調整局都市再整備推進課美術館建設準備班と長い名前の部署に出向となりました。業務内容はただ一つ、国の有利な起債(地総債)が使える間(平成16年度まで)に新しい美術館と博物館を建設すること。平成14年度に着任した時は、美術館は設計者の隈研

吾氏による平面計画が出来上がった程度、博物館は設計者の黒川紀章氏の設計が始まった頃、あと3年ちょっとで建物完成まで持っていくとのことで、当時のF課長からは「走りながら考えろ」と言われたものです。県の一大プロジェクトに関わることができ、民間の文化関係者や知事部局の職員と親交を深めることができ、今も財産となっています。平成17年4月の美術館開館、同11月の博物館開館を無事終え、平成18年に学芸文化課に戻りました。しばらくは平穩に暮らしていましたが、9月に文化庁が突然「世界遺産の暫定リストへの追加登録を希望する自治体は提案書を11月末までに提出するように」との通知がありました。それを受け当時、知事部局から来られていたS総括とO補佐の活躍により「長崎の教会群…」が見事暫定リスト登録を勝ち得ました。知事部局の人たちのフットワークの軽さと明瞭なヴィジョンを持った仕事ぶりに感銘を受けたものでした。しかし、ここからが世界遺産への道の始まりでした。私もこの後平成23年度までの5年間世界遺産と付き合いました。この間、スペインの世界遺産委員会への出張も経験させていただきました。その後「長崎の教会群…」は「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として平成30年6月世界遺産に登録されました。関係の皆さんのご尽力に敬意を表する次第です。

その後、教育環境整備課と学芸文化課をそれぞれ2回勤務し、今日に至っています。これも全て、先輩諸氏や同僚・後輩のお陰と感謝しています。本当に自分は素晴らしい人たちに巡り合えたと思っています。最後に、毎朝笑顔で送り出してくれた妻に感謝して学校事務職員人生の振り返りを終えたいと思います。



編集後記

日々の事務処理に右往左往しながらも、どうにか第53号を発行することができました。

定年退職を迎えられる日高学芸文化課長様をはじめ、ご寄稿いただきました7名の皆様に心から感謝申し上げます。とても懐かしく拝見いたしました。県庁新別館が不夜城と言われ、24時間戦えますかのコマーシャルソングを歌いながら仕事していた時代、思わず中島みゆきの「時代」のフレーズが飛び出します。

これまでの過去の失敗を糧に、新たな発想で事務改善を考えていく事は、時間がかかっても大きな成長につながります。イギリスでは、電車や街中でもマスク無しの生活が定着しつつあるように、生活様式もwithコロナの新たな局面を迎えようとしています。今年は、事務長会、事務職員協会の皆さんともっと会って、いろんな議論ができればと願っています。

(E・K)